

平城宮東大溝 SD2700出土金銀蒔絵

八角棒漆膜の顕微鏡観察

平城宮跡発掘調査部

1986年に平城宮東大溝 SD2700から出土した蒔絵八角棒（奈良時代後半）に関しては、既に表面観察結果を『年報1986』で報告している。今回、京都市埋蔵文化財研究所の岡田文男氏に依頼して、八角棒の漆塗膜断片からプレパラートを作成し、顕微鏡でその断層観察を行った。この作業には、漆芸家の北村昭斎氏らにご協力いただいた。その結果、表面観察と合わせて、蒔絵の技法を詳細に知ることができた。判明した蒔絵の製作手順と所見は以下の通りである。

- 1) ヒノキとみられる柾目材から、八角棒を作り木地とする。表面はあまり平滑に仕上げない。
- 2) 木地の上に直接掃墨を混入した黒漆を厚く塗り、表面を平滑に仕上げる。
- 3) 漆で草花文を描き、その上に淡く金粉と銀粉を場所を分けて蒔く。使用されている金粉は不定形であるが、角はあまり尖っていない。銀粉も金粉に近い形状をとる。それぞれの文様部分には若干互いの粉の混入が見られ、金粉と銀粉が同じ製作段階で蒔かれたことがわかる。粉蒔きの作業は粉筒か、毛棒であしらって行ったらしい。粉の周囲に、生漆か透漆で粉固めを行う。
- 4) 粉固めの後、さらに黒漆を厚く塗り重ねる。木質部の凹凸に従って漆のヤセが見られず、漆が粉を包み込み充分乾燥した後、粉を研ぎ出す。研ぎ出された面は完全に平滑で、粉の体積の半分以上が研ぎ出されている。しかも、角の漆膜の薄い部分を研ぎ破いておらず、優秀な研出技術と研磨材（硬質で金属粉を研ぐのに適した研ぎ炭）が用いられていることがわかる。
- 5) 伝統的技法では研ぎ出しの後、砥の粉と種油を混合した磨き材で磨き、研ぎ傷を消し、光沢を出す。この八角棒には細かい研ぎ傷が残されており、磨きは加えられていない。
- 6) 銀粉には表面に露出した小さな面にも錆が生じ、ふくらんで錆の結晶を作っている。
- 7) 同時代の正倉院金銀鈿荘唐大刀の鞘の「末金鏤」の技法と比較すると、使用する粉の形状は似ているが、「末金鏤」では粗い粉をあまり研ぎ込まず、漆膜より突出した状態で仕上げており、粉の体積の半分以上を漆膜と平滑に研ぎ込んだ八角棒の技法はより高度なものといえる。（臼杵 勲）

金銀蒔絵八角棒

漆塗膜の断面（金粉の周囲を透漆で固定した状態）×500 蒔絵粉の平面（研ぎ傷は粉上と漆膜面を貫通している）×40